

新選組血風録

司馬遼太郎

司馬遼太郎

新選組血風録

中央公論社

新選組血風録

©一九六四
映印堂

価四三〇円

昭和三十九年四月八日 初版発行
昭和四十五年二月十四日 八版発行

著者 司馬遼太郎

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電(五六二)五九二一(代)
振替東京三四

目次

油小路の決闘

芹沢鴨の暗殺

長州の間者

池田屋異聞

鴨川銭取橋

虎
徹

前髪の惣三郎

胡沙笛を吹く武士

三条磧乱刃

セ

三

五

六

七

二六

二五

二五

一五

海仙寺党異聞

一五

沖田総司の恋

二八

槍は宝蔵院流

四〇

弥兵衛奮迅

六一

四斤山砲

六三

菊一文字

七三

挿画
風間 完

新選組血風録



油小路の決闘

京の室町の職人の家にうまれたおけいは、妙な癖のある男と、洛中九条村の百姓家の離れで同棲した。

男の名は、新選組諸士取調役篠原泰之進（うしろべやくしのはらたいのしん）といった。江戸ことばをつかう色白な壮漢で、癖というのは、ひまさえあれば、井戸ばたへ行つてざぶざぶと耳の穴をあらうことであつた。

あるとき、悪意な医者から、「そういう癖はやめさせたほうがいい。もし耳のなかに水が入つてそれが腐れば、命をうしなうことがある」といわれたことがある。その翌朝、泰之進のあとを追つて井戸ばたへゆき、つるべをおさえ、「おやめやす」

とつよくいった。

泰之進は、おけいがとりあげようとするつるべを少年の

ような仕種で抱きかかえた。

「いやだ」

「毒どすえ。きょうから、おやめやす。お耳がかゆいなら、きょうから毎日おけい^{おけい}が耳そうじをしてあげます。な、それがよろしおすやる」

「ばかな」

と、泰之進はかえってひらきなおった。つるべは、かかえたままである。

「男というのは子供のころにいたいゝんな癖を大事に持ちかかえて、オトナになりきれずに生きている。女とはちがう。男どもがその持ち癖をなおせば女にとってどいつがどいつだか、さっぱりわからなくなるじゃねえか」

癖があるからこそ男だ、と泰之進はいうのである。

「せやけど、お命にかかりますえ」

「命などは運ひとつのものだ。耳を洗ったぐらいで死ぬようなかばそい運なら、おれはとつくに修羅場^{しゆらば}で死んでいく」

ときかなかった。

もう一つ、癖とはいえないが、この男にはこまった嗜好がある。豚がすきだということであった。どこで手に入れているのか、ときどき豚肉を買ってきて、

「おけい、煮ろ」

と命ずるのであった。これだけは京者のおけいは閉口した。

当時、食用の肉といえば魚鳥にかぎったもので、四足獣の肉はたべなかったし、幕府の法度でもあった。もつとも猪、鹿や味噌漬^{みそづけ}けの牛肉などは江戸や大坂のものじ屋で売っていたが、それらは「葉喰い」と称して病人か、病人をよそおう者しかたべず、その「葉喰い」をするときも、わざわざ神棚に紙をはって目張りをし、用いた鍋も庭のすみへもちだして二日間、天日^{てんじつ}にさらすというほど忌みきらったものである。

おけいは、はじめ、

「それだけはんんして」

と手をあわせてたのんだ。泰之進はあざわらい、

「冗談じゃねえ、時代はかわっている。これだから京者は因循^{いんじゆん}でいやだというのだ。江戸では、將軍^{くわんじゆん}さまの後見役の橋卿^{はしけい}（慶喜）でさえ豚がだいすきだというので、町方では大はやりだぜ。豚を食うのは江戸っ子の自慢になっているくらいのもんだ」

かなわない、とおもった。情人というより、腕白小僧をひとり飼っているようなのだとおもった。

泰之進とのそもそのなれそめもかわっていた。おけいはかつて同職の家にかたづいて不縁になったことがある。

その後は実家にもどるのがいやさに祇園の茶屋でお運びをしていた。

お運びは、座敷へ膳部をはこぶだけの役目である。だから、この茶屋では馴染だという泰之進の顔は、そのことがあるまで記憶がなかった。泰之進は早くからおけいを知っていたらしい。

そのことというのは、ある夜、廁からのもどらしい泰之進と暗い廊下ですれちがったことからおこった。この男は、いきなりおけいを抱きすくめた。声が出なかった。泰之進は耳もとで、「おれは新選組の篠原泰之進という者だ。おなごなどは、こうでもせぬと獲えられぬ」と、野で鳥でもつかまえるようなことをいった。

体のどこをどうおさえられてしまっているのか、もがこうとしても体がきかなかった。あとできけば、篠原は、良移心頭流の柔術の名手だという。

「こうみえても、おれは実のある男のつもりだ。おれの休息所へきて、奉公せい」

「……………」

「休息所は、九条村の茂兵衛方にある」

おけいは、そのようなことより、泰之進の手が、いつのまにかすそを割ってなかに差し入れられていることに当惑していた。

「いやか」

いやといえば殺されると思い、必死で、くびをたてにふった。

「これは支度金」

小判三枚をおけいのふところにねじこんでから、

「そうだ、わすれていた」と泰之進は、ばつがわるそうに、

「名をなんという」

「お、おけい」

「そうか。——」

馴れそめというのは、それっきりである。泰之進の厚い肩が廊下のむこうの闇溜りに消えてゆくのを見送りながら、おけいは、へたへたとその場にすわりこんでしまったのをおぼえている。

新選組の内規では、局長近藤勇以下、伍長までの幹部は、営外居住ができることになっていた。その住まいを「休息所」と称し、休息所では大半の幹部は女の奉公人をもっている。妾であった。

「じつをいえば、おれも、そいつがはしかつたのよ」

と、篠原泰之進は、おけいと最初の夜、あやまるようにいった。年は案外、若くはない。

要するに、無邪気な男だとおけいは思った。小柄で肉のやわらかいおけいの体をはじめて抱いたとき「ああ、おん

なはいい」と何度も言い、「おれが京へのぼってきたのは、京のおんなを抱きたかったからだ。こうして女と寝ていると、人間死にたくねえ、とつい思ってしまう」と、あどけないほどの高調子でいった。その夜、おけいは、しみじみとこの男に尽してやろうとおもった。むろん、ときどき、泰之進の体から血のにおいが匂ったり、着衣に返り血をみつけたたりしておけいはおぞ毛の立つことがあったが、その無邪気な顔をみていると、この男が、ほとんど毎日のように京で人を斬っている新選組の浪士だとはおもえなくなる。ところが、篠原泰之進が、ただの無邪気な男ではなく、京者が壬生浪とよぶすさまじい生きものであったことを知らされたのは、慶応二年三月の末のことであった。この事件のあと、泰之進の身辺がにわかにいそがしくなり、ついにそれが新選組を真二つに割る騒動にまで発展したために、おけいは、その日の日付までおぼえているのである。――

その前のあさ、おけいは、隊へ出かけてゆく泰之進を、枝折戸の所まで送った。泰之進は、いつものように、黒縮緬の羽織に黒蠟鞘の大小、白い鼻緒の雪駄といったひどくしゃれた容儀をしていた。ふとふりむいて、「あすの夜は、豚だ」といった。

「肉は、屯営の小者の和助にとどけさせるから、ねぎの支度をしておけ、酒も、だ。客が四人来る。客の名は」

伊東甲子太郎

と、泰之進はいった。伊東は、新選組参謀という肩がきで、副隊長の土方歳三と同格として重んじられている人物である。――あとは、茨木司、富山弥兵衛、毛内右之介の三人。

おけいは、

「はい」

と素直にうなずいて、送り出した。みると、花見どきの曇り空に、東寺の塔がにじんだように浮かんでいた。

二

あとでわかったことだが、その日の篠原泰之進は、午後から屯所を出、鈴木三樹三郎をつれて清水の花を見にゆき、帰りは祇園のなじみの茶屋へ立ちよった、という。

最初の事件は、その帰路、三樹三郎と連れだつて三条大橋の橋ぎわまでさしかかったときにおこった。慶応二年三月三十日である。

おりから河原のあちこちに夕もやが動いており、京にはめずらしく鮮烈な落日の宵で、橋上を行きかう人の顔が、どれもこれも赤く染まってみえた。泰之進は酔っていた。しかし連れの鈴木三樹三郎はさらに酔っていた。鈴木は酒

にだらしない男で、足もとさえさだかでなかった。

鈴木三樹三郎は、新選組伍長である。伍長といえは隊の下級幹部で、斬込みのときはその人数の中心になる人物だけに一流の使い手がえらばれていた。

新選組では発足以来、入隊するときは、近藤勇、土方歳三の検分のもとに、きびしい武術考試をする。その成績によって入隊をゆるし、階級をきめるのが常例だったが、鈴木三樹三郎のばあいだけはその考試を経ずにいきなり伍長になった。参謀伊東甲子太郎の実弟であつたからである。流儀は北辰一刀流だが、腕は平隊士よりも劣つていた。

伊東甲子太郎は、かねがねこの実弟のことをあやぶんで、江戸以来の旧友である泰之進に、

「三樹を自分の弟と思つて介添えしてくれ」

とたのんでた。

その三樹三郎が、泰之進から四間ばかり先きをよろめきながらゆく。

むこうから、西国の脱藩浪士らしい武士が三人、これも見えりらしく酒気をふくんでやつてきた。

よろけながら歩いてた三樹三郎は、その左はしの大男のほうへ泳ぐように近づき、いきなり肩をあてた。

「無礼者」

と叫んだのは、三樹三郎のほうであつた。いきなり刀を

抜いた。いかに喧嘩が役目の新選組でも、これは無法すぎた。

橋の上の通行人は、一せいに立ちどまった。三樹三郎は、その群衆の目に昂奮し、「りやりや、ありやりや」と奇妙な気合をかけつつ高腰を浮かして踏みこんだ。とても人を斬れるような芸ではなかった。

浪士三人はいずれも相当に使えらしい。だまつてキラキラと抜きつれた。篠原泰之進が橋板を蹴つて駆けだしたときは、三人が三樹三郎を押しつつ上で上段にふりかぶつた瞬間だつた。泰之進ははじめ仲裁するつもりでいた。しかしわけ入つたときはすでに遅く、相手の切尖が三樹三郎の頭上に落ちるのを払いのけるのがやつとだつた。

とびさがつて雪駄をすて、

「拙者は新選組の篠原泰之進である。お相手になろう」

新選組ときいて相手の顔色がかわつた。大変な男にひつかつたと思つたらしく、三、四歩ひきさがつた。泰之進は、千葉門下の逸足といわれた男だが、撓劍術しなけんなどよりも真劍の場数できたえた呼吸がある。真劍の喧嘩では、相手のひるみにつけ入つて捨て身で斬撃すればかならず勝てることを知っていた。

まず、大男に目をつけた。抜いた瞬間、背後にまわつた男の刀が背を割りつけてきたが、かまわずに前へ大きくふ

みこみ、いきなり刀を上段にあげた。相手の大男がつい釣られて刀身を頭上にかざしたとき小手にスキができた。

その右小手へ、泰之進の刀が目にもとまらぬ速さで打ちこまれた。

「見たか」

「まだまだ」

男は、左手で刀を擬している。打ちこみが浅すぎて、わずかに右腕の肉を斬ったにすぎない。血が数滴、橋上にしたたった。

このとき泰之進は、みごとな芸をみせた。相手のおなじ傷口にふたたび刀を打ちこんだのである。骨を断つや、同時にキラリと刀身をひねりあげたために右腕は、生きもののように宙空をつかんで矢にとび、やがて群衆のなかに落ちた。

「逃げ」

相手のたれかが叫んだ。三人は見物を蹴散らして逃げたとき、泰之進は、はじめて酔いが体じゅうにまわった。

「鈴木、行こう」

「おう」

三樹三郎は、勢いよくうなずいてみせたが、太刀打ちの昂奮がさめないらしく、両こぶしのふるえているのが、泰之進の目にもみえた。

数丁歩いて寺町の誓願寺のあたりまでできたとき、右の股が濡れているのに気づいた。

（尿でももらしたか）

決闘のときに、糞尿をもらす者もある。泰之進はそれかと思い、袴をまくつてみた。

血だった。ふくらはぎのあたりまで真赤に染まっていた。（しまった）

手を入れて傷口をさがすと、袴の腰板の上あたりで指がずぶりと入った。一個所だが、一寸ほどの深さに切り裂かれている。気が立っているためふしぎと痛みはなかった。

「おい」と泰之進は、頬をひきつらせ、「どうやら今日が、おれの命日になるらしい」

三樹三郎は、蒼ざめて傷口をみていたが、

「死ぬほどの傷でもなさそうだが」

「おれのいうのは、腹のことだよ」

「いや、傷は背中ではないか」

「なにを悠長なことをいっている」

泰之進は、これ以上この愚鈍な男の相手になる気がせずすぐ駕籠をひろって九条村のおけいのもとに帰り、すぐ外科をよばせた。

「どうなされました」

「祇園の石段で、ころんだだけのことだ」

泰之進は、わざとこつけない身ぶりでころぶまねをして
みせた。おけいも釣りこまれて笑った。

おけいはすぐ湯と晒布をととのえたが、外科が手当を
しているあいだは、部屋に入ること泰之進はゆるさな
かった。

外科が帰ってから、おけいが障子をひらいたときほどお
どろいたことはなかった。この男は、床柱を腰にあててあ
ぐらをかき、腹に抜き身の脇差を突き立てようとしていた
のである。切腹というのは芝居でみたことはあるが、自分
の目でその実物を見るのははじめてだった。

「見たか」

ばつのわるそうな顔をした。

おけいは、ものもいわずに武者ぶりついたが、苦もなく
泰之進につきころばされた。

「すこしそこで眼をつぶっている。なあに、すぐ済むこと
だ」

「なにが済むのだ」

「これだ」

と腹を指さした。

「何ンで、おなかをお召しやすのえ？」

「それが仕方がねえのさ」

新選組にはおそるべき隊規がある。

新選組をして史上最強の殺戮団の名を高からしめたのは、
かれらが遇りぬきの剣客ぞろいであったことにもよるが、
それよりも秋霜のようにきびしい隊規があったからであ
る。

近藤と土方は、人間の性は臆病であることを知りぬいて
いた。この二人はすでに武家社会でほろんでいた伝説的な
武士道をもって隊士を律し、いささかでも未練臆病のふる
まいのある者は、容赦なく断首、暗殺、切腹に処した。結
党以来、死罪になった者は二十人を下らない。

たとえば、古来、武家の常法として大將が討死すれば兵
は引きあげてもかまわないことになっていたが、新選組に
あっては、

——組頭がもし討死した場合は、組衆はその場で討死す
べし。

というすさまじい隊規があった。また激闘中に、朋輩の
死体を後方にひきさげること禁じ、

——はげしき虎口において死傷続出すとも組頭の死体の
ほかはひき退くことまかりならず。

いずれも、戦国の武士の風習にさえなかった律則であっ
た。

さらにおそるべき隊規は、

——私事でおそるべき隊規は、
私事でおよんだとき、相手を斃さず自分

のみが傷を負うた場合、未練なく切腹すべし。

というものであった。相手を斃す以外に死をまぬがれる法がないために隊士はいよいよ剽悍にならざるをえなかったのである。篠原泰之進が、自分の傷を発見したときおどろいたのは、この隊規があったからであった。相手はすでに逃げていた。しかも手傷は、後ろ傷だった。まぬがれぬと思った。

「右のような次第だ。切腹のほかはない。ましておれは隊士の非違を監察する役目についている。ここは、きれいに腹を切っておいたほうが無難だろう」

ひとごとのようにいった。

おけいは素直にうなずいてみせ、肚のなかで別のことを思案していた。おけいのこのときの思案が、のちに新選組最大の暗闘事件をひきおこそうとは、彼女自身も、むしろ予想することができなかった。――

「とにかく、心置きのうお腹を召しとくれやす」

「おお、いわれずとも切るわ」

「しかし、いままで旦那様のお身の上のはなしをきいたことがおへんさかい、お死くわれやしても、ご遺髪を送る先きがわかりまへぬ。おくさまは、どちらにおいででござります」

「妻なんざ」

もったことがない、篠原泰之進は吐きすてるように言い、

新選組に入るまでのいきさつを手みじかに語った。

かれは、久留米藩の江戸定府の輕輩けいはいの家にうまれた。父が早く失明したために、他家のように内職をして生計をうるおすことができず、少年のころは毎日ほとんど粥かゆばかりをたべていたような極貧の暮らしだった。兄が世をついでから、内職に加留多かろたの絵付けをはじめ、多少余裕ができたので、かれは、神田かみだ於玉ヶ池の玄武館に通って剣をまなんで大目録まで進み、また家中に良移心頭流柔術の印可をもつ者がいたので、これに就いてついに師をしのぐほどにまで達した。

しかし、輕輩の家の次男が、いかに武芸に習熟したところでどうなるものでもなく、兄の家に養われている身では、いつまでたっても妻をもてるほどにはなれない。泰之進は、はやくから脱藩を決意していた。

そのころ、同門の先輩で、深川佐賀町に北辰一刀流の町道場をひらいている常陸志津久しづひさの脱藩浪士伊東甲子太郎こうしちろうという人物があった。文武ともに秀でた才人で、論才があり、江戸府内の攘夷論者とまじわってすでに志士のあいだでは多少の名があった。号を蛟竜きょうりゅうという。淵にひそんでいてもいずれば雲を得て天を駆けるという野望を托していたのであろう。伊東が深川佐賀町に小さな町道場を構えていたのも、同志をあつめて一勢力をつくり、機をみて風雲に乗り